

モンテッソーリ教育の

子どもたち



川涯 利雄

老人ホームを去る

七十五歳になったら老人ホームの園長を辞めようと決めていた。施設の建て替え・後継者の育成も終わった。職員配置も整った。職員の笑顔が穏やかでうつくしいことがなにより園の誇りである。

地域の協力をいただいて、防災訓練を実施した。災害時に助けを求めて施設に走りこむ人々があったら、それも受け入れなくてはならない。そのための毛布・食料も確保した。

特に、老人ホームには、ベトナム（本部はフランス）から来てもらったシスター方が四人（二人は鹿児島で日本語勉強中）いる。そ

の祈りや笑顔が、人間大事の和らいだ空気を醸し出し、園全体にやさしい空気を広げている。シスターに爪を切ってもらい、耳の掃除をしてもらう利用者の陶然とした笑顔に会うのが喜びだった。私は高齢のご婦人たちから熱いハグを何度もいただいた。私の任務はこれで終わったと思った。

幼稚園園長受諾

今年三月初旬、九年前、私を老人ホームに任命してくださった司教様に、後進に道を譲りたいと辞職を申し出た。感謝の言葉をいただいたあと、今度は、幼稚園の園長として、もう一仕事していただきたいと依頼を受けた。思いもしない人生がまた新たに展開することになった。考える時間をいただきたいと申し出たが、カトリックの信者が司教様の依頼を断るわけにはいかない。数日後、受諾の手紙

を出した。

三月二十九日、老人ホームの職員から心づくしの送別会をいたたく。こんな光栄な送別会は初めてだった。翌三十日引越し。そのまた翌日の三十一日、ザビエル教会で幼稚園職員の辞令交付式に参加した。

四月一日、私は鹿児島市のカトリック系幼稚園の入学式に出席。創立以来四十五年、七代にわたって神父様が園長を務めた幼稚園に、俗人の私が赴任し、「新しい園長先生」という立場で、幼児八十人とご父兄の居並ぶ入学式に臨んだ。

驚異の子どもたち

三歳・四歳・五歳の幼児八十人の入学式である。泣いたり、わめいたり、さぞにぎやかなことだろう。そういう子どもたちに、どういう言葉で、どういう挨拶をすればいいのか、

私は直前まで、心が決まらなかつた。会場は隣接するカトリック教会のお御堂である。

「入場！」の言葉につづいて子どもたちがお御堂に入ってきた。両手を合わせてイエス様の像に丁寧に一礼して幼い子どもたちは入ってくる。自分の位置に着席した子供たちは静かで、よそ見をするものはいない。「起立」、「お祈りのことば」、「聖歌」と続く。幼い子どもたちは長い「主の祈り」を朗々と唱え、まつすぐ顔を挙げて聖歌を歌う。歌詞を間違う子など全くいない。明るい声がお御堂に満ち、どの子どもも顔も引き締まったいい顔だ。

新園長の講話を聴くとき、ああ、この人が新しい園長先生なのかと興味深そうな、親しそうな目が私を見つめた。しかし、態度は乱れず、目はやさしいほほえみを湛えている。清楚に姿勢を正して話を聞いてくれた。

これはなんということか。かねてみる幼な

子の甘えや喧騒はここにはない。子供たちは生活習慣としてのマナーを身に着けた一人の人格なのだと思った。私は七十五歳にして、また、新たな出会いをいただいた。これがモンテッソーリ教育を受けた子供たちの姿である。

三歳の新生児もいるではないか?! 彼らはどうして祈りや聖歌を記憶したのか? どこでマナーを身につけたのか? という疑問があった。

わが幼稚園では(他の幼稚園もやっているのだが)、一歳児から、月に一度、母親と一緒に幼稚園に来てもらって、基礎的な保育指導をしている。職員のみごとな指導力の成果というほかはない。

モンテッソーリ教育

モンテッソーリ(1870~1952)はイタリアの女医である。女性で初めて医科大学に学び、またローマ大学で実験心理学・教育学を学んだ。はじめ貧民窟の精薄児の教育を任されたが、独自に開発した教具を用いた教育法で驚異的な成功をおさめた。さらに、その方法を一般の幼児教育に用いて圧倒的な成果を上げ、モンテッソーリ教育法は世界に広がったのである。イタリアのムッソリー政権の弾圧から脱出するなど、苦労も多かったが、彼女の開発した幼児教育法は世界中から迎えられた。オバマ大統領夫妻、クリントン元大統領夫妻、コンピューターのマイクロソフト社を設立したビル・ゲイツなど、この教育法で育った世界の大物は枚挙に遑がない。普通の教育と何が違うのか? 子どもが「自律心」を身に着け、4歳、5歳で責任を知り、

社会道徳を身に着け、一個の人格として「自立」するのである。

押し付けられたものではなく、自分の自由選択の中で、自然に身に着ける、ここが尊い。

(1) 敏感期

モンテッソーリは、子どもたちには自然(神)が与えた成長の宿題があることを知った。少年少女期に思春期という時期があるように、0歳から3歳、3歳から6歳の子どもたちにはそれぞれ、〈本来の自己〉になるための厳しい宿題が生命のなかに組み込まれていることを女史は発見し、3歳から6歳の期間を「敏感期」と名付け、人間成長のもっとも大事な時期として位置づけた。幼子たちはこの期間に物に触れ、疑問を抱き、確認するために、何でも自分でやろうとする。「僕がする」「私がする」と言っただけかかない時期である。

自分で選び、自分で取り組み、自分で理解し、納得し、自己の人格を開いていくためには、子どもたちにふさわしい「環境」が必要である。モンテッソーリ教育には「環境」が不可欠である。環境の一つは父母であり、教師だが、工夫された「教具」が特に大事である。

モンテッソーリは子どもたちのために、千以上の教具を作った。その中から、今この子どもたちに必要な教具を選び、教室にきちんと設置して置く必要がある。

工夫された教具に出あった子どもたちは次のように反応する。

1 自主的に教具を選び、教具が要求する「お仕事」に取り組む。(この時、大人は介入しない。)

2 子どもは没頭し、おなじ「お仕事」を繰り返す。周りの音響にも気づかないほど

の集中力を示す。30人近い子どもいる教室は静まっている。

3 これで行った。これでこの「お仕事」

は終わりだと子どもは宣言する。

「先生！僕これ、できたよ」と報告して、次の段階に進む。

教室に、子どもを叱責する声などない。

(2) 「お仕事」

わたしは「お仕事」と言った。そう、この取り組みは子どもの「お仕事」なのである。

モンテッソーリ教育で最も大事な言葉の一つである。子どもたちは「本来あるべき自分に成長するために」真剣にその教具の求めるものに取り組む。その時間をモンテッソーリは「遊び」・「作業」などと安易に呼ばない。本来の自己の命を確立するために、真剣に取り組む子どもたちに敬意を籠めて「お仕事」

と呼ぶのである。

(3) 集中・成就感の成果

一人で「お仕事」をする子どももの集中力はすさまじい。周りに人がいても気がつかず、その近くで音楽が響いても気づかないほどだ。この集中力の中で、彼らは社会生活のルール、数の概念、言葉と文字の存在、文化（歴史・地理など）など、人間が身に着けるべき基礎知識に気づき、発見を重ねる。本が読め、九九が言える子どもも少なくない。

その「お仕事」に取り組んだ成就感・充実感を子どもたちは毎日、自分の内に積み重ねる。そのなかで、自然に誇りが育ち、他者への思いやりや愛が芽生え、結果として、社会的マナーを身に着けた「自立」した幼い紳士・淑女が出来上がってゆく。

モンテッソーリ教育法は人間の生理的自然

の理にかなった教育法なのである。

(4) 縦割り制度

もう一つ大事なことがある。モンテッソーリ教育は薩摩の郷中(ごじゅう)教育と同じ縦割り制度を採る。

各クラスには、3歳、4歳、5歳児がいて、年齢の違う者同士へアを組む。年長組の子どもが年中・年少の子どもの指導をする。年長者は幼い者を労わり、その中で小さき者・弱い者へのやさしい心を身に着ける。この過程で、自分の内に自信や誇り、社会的マナーを身に付け、自律心が育ち、自立心を獲得する。年少の者はやさしい先輩にあこがれ、先輩の真似をしながら著しい成長を遂げる。

私が赴任して一学期が過ぎ、二学期が始まった。この間、子どもたちが争う姿を一度も

見ない。年長の子が年下の子を指導する姿を何度か見たが、子どもを叱る先生の声を一度も聞かない。叱声や大声などよき教育の場には不要なのである。子どもというものを科学的に十分研究し、人間を熟知したうえで出来上がった教育法は本物である。

わが敏感期

私は昭和十五年十月生まれだから、太平洋戦争が終わる昭和二十年八月には、まだ、四歳と十か月だった。もう七十一年昔のことだが、わたしにも、たしかに「敏感期」があった。

私の四、五歳のころの国は極貧状態で、大人たちは「食」を確保するのに懸命で、子どもたちに構っていられなかった。子どもたちは放任され、自由だった。

貧しい生活の中で苦勞して働く親を知って

いたから、子どもたちは親孝行ということをも十分知っていた。親に迷惑を掛けないよう、自分で選び、自分で作り、自分で怪我し、蓬を揉んで自分で治療し、自分という人格を作り上げていた。すべて自然に学んでいたのだった。

思えば、モンテッソーリの教具はなかったが、自然に学びながら、モンテッソーリ教育によく似た状態で我々は育ったのである。

わが父は満州から病んで帰り、三人の子を母に残して結核で逝った。大きな地主の娘だった母は、実家に身を寄せていたが、自立のために教職に復帰し、長女一人連れて任地に赴いた。私と一つ年上の姉は、そのまま祖母の家に預けられた。間もなく祖父が逝き、叔父が戦死し、大きな家は祖母と小母（叔父の嫁）、その娘二歳、そして私の姉五歳。男は四

歳の私だけだった。年季奉公の若者が常に何人かいたが、祖母と小母がうまく協力して家を守っていた。私の日課は風呂を磨き、水を溜めることだった。風呂焚きは祖母の役割だった。

「利雄ちゃん、風呂の水、汲んでね」と小母に言われると、私は「オツケー。パラション！」と答えて、井戸に走った。深い井戸の水面に着いた釣瓶つるべがゴボリと沈み、ずしりと重くなる。それを滑車で引き上げる。手繰り寄せた綱は、右手を大きく回して輪を描き、きれいな輪が井戸の縁に重なって高くなる。輪の大きさがほぼ同じであることが誇らしかった。

汲み上げた水を桶に移して風呂に運ぶ。その距離が意外に長く、途中、階段が二段ある。水桶そのものも重いから釣瓶2杯の水はまだ運べない。一杯ずつではいかにも面倒だ。

四歳の子どもは考えた。桶に穴を開けよう。孟宗竹の節を鉄棒で突き落として、桶に差し、風呂に直接水を流す。直線距離は手で運ぶ距離の半分もない。これはいいぞ！

私は、夢中になって作業に取り組んだ。まず、風呂場と井戸の直線距離を縄で測った。裏の竹山に入り、鋸で細身の孟宗を切り、鉋の裏を使って枝を落とし、鋸を使って、根元の太い部分、先の細い部分を切り落とした。日頃、大人たちのすることをしつかり見て身に着けていたのだ。

鉄棒を持ち出して、竹の節を突き落とした。だが、桶に穴を開ける段になって、ノミがうまく使えない。桶を壊さずに穴を開ける作業は僕には無理だと思った。年季奉公の兄ちゃんのかなかで、特にやさしく賢そうな兄ちゃんに頼んで、桶に穴を開けてもらうことに成功した。兄ちゃんは孟宗竹の先をすこし削って

細くし、そこを布で巻いて穴にびたりと差し込んだ。「いいね。できた！」と兄ちゃんも喜んだ。利雄式水汲み装置はこうして完成した。

「利雄ちゃん！お風呂の水頼みます！」「オッケー。パラシヨン」。快活な声で私は応えたものだ。（この言葉の意味を知っている人はお教え下さい。満州にいた母から教わったのだと思います。ロシア語か？）

モンテッソーリ教育を受けた現代の聡明な子どもたちはどんな工夫を凝らすだろうか？

世界の危機・日本の危機

世界は今や、すさまじい様相を呈している。これまで見なかった陰惨な戦争やジハードが勃発し、世界中に火の手が上がっている。

世界中の富が1パーセントの金持ちに集まり、世界の貧富の差が徹底的に増大した現代社会の戦いは、実は食料争奪戦なのだ。

2065年、あと五十年もすると、地球人口は百億に達するという。現在の七十五億人にさえ不足する食料を百億人分、世界は増産できるのか。まして、世界食料を作り、技術を生み出してきた先進国の人口は五十年後には半減することが統計に明確に表れている。「先進国病」と呼ばれて、人口が減少することとは、すでに世界の人々が認識している。

帝国主義や植民地政策が復活し、人間の奴隷化が進むのではないかと危惧される。

そういう時こそ日本の若者に期待したいが、五十年後の日本は、人口六千万〜五千万程度の小さな国になるという。その国力で世界救済の力があるだろうか？

現在の日本は貧富の格差が広がり、低賃金の若者たちはすっかり夢を失い、労働意欲も失って、引きこもりが五十四万人もいるとい

う。国が掲げる一億総活躍時代という謳い文句がいかにも白々しい。

結婚の意欲も無い若者が多く、結婚しない風潮は若い男女の性遺伝子に影響し、今や日本の若者の精子・卵子の生命力は高齢化してしまつたというデータもある。少子高齢化はますます深刻になってくるだろう。

今でも、小学校は次々に縮小され、消え、子どもたちの姿は村から消えた。周りは独居老人ばかりで、「あと五年もしたらこの村は消えます」と自ら語る村は数知れない。

出稼ぎに東京・大阪に出た息子・娘は都会で敗北感を舐めない限り、帰ってこない。それなりの家庭を構築し幸福を手に入れて、今更、余命いくばくもない親を看取るために、都会の生活を捨てて帰るわけにはいかないのである。しかし、人間すべてに神がくださった愛・思いやりの感性（孟子が言う「惻隱そくいんの

心)が鈍磨して、老いた父母の痛みや孤独の悲しみさえ感じないほどになったのだと思うと恐ろしい世の中である。拜金主義に奔った日本人のあわれな病いと言うべきだろう。

子が親を殺し、親が子を殺す事件が頻々と起こり、無差別殺人も頻発する。障害者無用論を唱えて、自分が勤務する施設の障害者十九人を殺す事件もあった。

鳥にあり獣にあり他人(ひと)にあり我にあり命というは何を働く
宮 柁二

人間は何をしでかすかわからない獰猛な動物になってしまった。現代は人格破壊者があまりに多い。一向に世に愛は広がらず、いじわるな人間は暗闇に棲息し、手下に卑劣な指示を小声で今も下しているのだろう。こうして、いじわるやいじめが日本中に蔓延し、子

供たちの殺人や自殺が絶えない。

神の怒り

こうした有象無象の跋扈する人間界を天から見下ろしておられる神の悲しみはいかばかりだろう。神が泣き叫び、怒る声は豪雨になり、鉄砲水になり、崖を崩し、人家を埋める。

地団太踏み悲しむ神の身震いは地震を引き起こし、怒りの波は黒い津波となって、原発を破壊する。

天は人間の善意で支えなくてはならないという思想がある。神は愛情籠めて、一人一人を唯一の存在として創造された。これまで、地球に存在しない貴重な新しい個性として神は愛情込めて一人一人の人間をお作りになったが、親への孝養を忘れ、人間同士争い戦う人間たちは、さらに創造主の神も忘れ、見限り、祈りの心も失って、自分勝手ばかり言っ

て、とうとう人間としての慎みを失ってしまった。これでは、神がお怒りになるのは当然だろう。

恐れを知らない人々には、天が落ちる話など、おとぎ話だが、私は本当に、人間たちの悪意・憎悪がはびこると天が落ちてくるという気がしてならない。そういう基本的な恐れ、つつしみを人間は放棄すべきではないと考える。

モンテッソーリ教育への期待

新しい社会を作るためには、子どもたちの教育が何より大事である。平和を愛し、弱者を労わる心をもった自立した若者を育てる必要がある。私は真のモンテッソーリ教育によって育った若者が、集団として手を組めば、この世の悪弊を一気に断つ力を作れるのではないかと期待する。

日本の鎖国を解き放ち、近代化を獲得し、世界の日本を作り上げた明治維新の力は、薩摩の郷中教育と長州萩の松下村塾の教育力の結末だった。今また教育の力が本当に求められる時代が到来している。

(歌人、華短歌会前代表、吉野幼稚園園長)

